

こぼれ話 30

幕末の麻疹大流行

今年、麻疹の流行がニュースになりました。麻疹はウイルス性の感染症で、高熱と赤い発疹ができ、重い合併症を引き起こすこと命にもかかります。

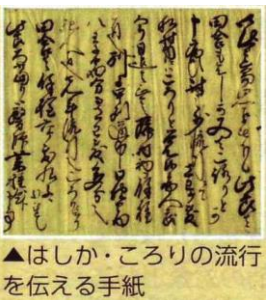
幕末の文久二年（1862）にも、江戸で麻疹が大流行しました。夏から秋にかけて、その死者は江戸の町だけで1万4千人以上になったといわれます。一度麻疹にかかると免疫ができませんが、免疫のない子供や若者は麻疹になりやすく、若き日の沖田総司も多摩へ出稽古に来て麻疹にかかり、門人たちに心配をかけました。甲州道中の日野宿も、八王子宿と並んで麻疹の患者が多く、死者がたくさん出たといえます。

しかもこの年は暴瀉病（コロリコロラのこと）の流行も重なり、麻疹で弱った病人が、さらにコロリにもかかることがありました。

日野宿名主の佐藤彦五郎は、貧しい人に薬を与え、独り暮らしの者へ米銭を与えた行いが奇特（感心なこと）であるとして、その年の暮れに江川代官から褒められています。

人びとは医師や薬だけでなく、祈祷や呪いにも頼り、麻疹の流行が過ぎるのを待つしかありませんでした。

現在はワクチン接種で、麻疹の予防ができます。



▲はしか・ころりの流行を伝える手紙